甲第73号証

聞き取り報告書

2022年10月31日

東京高等裁判所　民事部　御中

弁護士　井　桁　大　介

本訴に関し、以下のとおり関係者より聞き取りをしたので報告する。

日　時　2022年8月29日　午後2時半から午後4時

場　所　関西地方・主要駅前の貸し会議室

対象者　原告が経営するデリバリーヘルス店で働くキャスト2名

聴取者　弁護士亀石倫子、同井桁大介

内　容　別紙のとおり

以　上

（別紙）

（亀石）

まず簡単な自己紹介をお願いします。Aさんは提訴前にもお話を聞きました（甲4号証）。繰り返しで恐縮ですが教えていただけますか。

（Aさん）

私は20代半ばにデリヘルのキャストを始めました。そこから風俗業に関心が湧いて、本番系以外はほぼすべての風俗業を経験しました。全国47都道府県で働いてみようと思い立ち、旅行をしながら実現もしました。原告のお店には10年くらい所属しています。

（Bさん）

私も20代半ばくらいからデリヘルのキャストを始めました。原告のお店には9年くらい所属しています。これまで経験した風俗業は、ホテヘル、デリヘル、店舗型ヘルスです。風俗業を始める前から現在まで一貫して昼の職業（医療職）も続けています。

（亀石）

SWASHという性風俗産業の支援団体が2005年に発表した『風俗嬢意識調査』（要友紀子・水島希著）では、多くのキャストが自らの職業をさまざまな職業に近いと答えています。性欲の解消に止まらない精神的な支援の側面からは看護師や福祉・介護の専門家、カウンセラーや保母に近いと答えるキャストが大勢いました。料理を作って食べてくれる人が喜んでいるのを見て自分も嬉しいと例えるなど意外にもコックが上位に来ていました。身体的な負担という面で建設作業員などの肉体労働者に例える者も

少なくありません。娯楽や幻想を与えるという点で芸人や役者を挙げるキャストも4名いました。おふたりは自分の職業が何に似ていると思いますか。

（Aさん）

私は、役者、介護、リラクゼーションなどのマッサージ業の3つを兼ねているなという実感があります。

（Bさん）

私はマッサージや医学に近いところもあるなと感じています。基本的には昼の職業とほとんど同じです。お客様が帰る際に、「ありがとう」と満足そうに言っていただけると嬉しくなります。

（亀石）

一般的な調査で、20代から60代を対象に自分の仕事に誇りを持っているかとアンケートをしたら、そう思うが50％、どちらとも言えないは20％くらいという結果が出ているようです。他方でSWASHが行った風俗嬢調査では、キャストの60％程度が誇りを感じているとされていて、職業平均より1割程度高いようです。お二人はキャストという仕事に誇りを感じていますか。

（Aさん）

誇りというと少し大袈裟ですが、好きだから続けているというのは間違いありません。単純に楽しいですね。また、当初働いていたお店は待遇も悪く、自己肯定感は低かったのですが、今の原告のお店は働く環境がよく、誇りを感じるようになりました。やはり、お客様やお店から大切に

されると、どんどん仕事が楽しくなり好きになります。そうするとお客様へのサービスもよりよくしようという気持ちになって、好循環が生まれていきます。その結果として自分の仕事が誇りになっていくのだと感じます。

自分ではできないことをやってもらってありがとう、というのが職業の本質だと思います。特別なことではなく、したことに対して感謝され、それを受け取ることができる、幸せだなと感じます。仕事のたびに、もっとこの人に与えられることはないかなと考えています。自分が無理してまでやると辛くて嫌になると思いますが、自分が楽しいと思えることで、与えられるし貰えるので、やりがいがあります。

（Bさん）

同じく誇りというのは大袈裟ですけど、今の生活には満足しています。元々自分は、ぽっちゃりして胸が大きくてという体型で悩むことも少なくありませんでしたが、誰にも相談することはできませんでした。ところが、最初に所属したお店に自分と似た体型の人が多く、自分は特別ではないんだと。それを喜んで会いに来てくれるお客様がいて、元々はコンプレックスだったものが自己肯定感に繋がりました。風俗産業に入ることで、自分が所属するコミュニティが増えたというポジティブな感覚があります。

もちろんこの仕事を全肯定するわけではありません。合わない人はいると思います。ただ、この仕事で鬱になってしまった方もいるかもしれませんが、逆にこの仕事によって鬱が治る人もいるのは確かです。辛い思いをして続ける必要は全くありませんし、辞めたいのに辞め方がわからないとか、辞めた後どうしたらいいかわからない人には福祉などの助けが必

要だと思います。しかし、そうでない人、肯定的にこの仕事をしている人にはそのような対応は必要ないと思います。

性のことは後ろ暗いイメージを持たれています。そこで働いている人はかわいそうと決めつける人もいるのかもしれませんが、周囲を見ても今の時代に働く方にはそういう要素が少ないと感じています。自分がいてもいいんだという自信を持つことによって福祉から離れるという人もいます。全く知識がない子や精神的に成熟していない子が半ば騙されて入ってしまうという例もあるとは思いますが、ほとんどの子が自分の意思でこの職業を選び、続けていると感じています。

（Aさん）

全く同感です。福祉の対象とされるべき人は割合的には少ないと感じます。もちろん、福祉がより充実していればその分キャストを選ぶ人は減るかもしれませんが、現在の福祉の実情からすればそれはなかなか難しいと思います。また、福祉というのは最後のところは自分の人生を他人任せにするということです。自分の人生をコントロールできなくなります。何かのきっかけで福祉を打ち切られるかもしれません。さらに福祉では最低限の生活しかできません。

また、風俗には他の職業にはない大きなメリットがあります。時間にゆとりがあって、また働く時間を自分で決められるという点です。これは特に子どもがいる女性にとってはかなり魅力的です。自分で真面目に働いて、かつ時間にゆとりができる、子どもを育てながら働くことができ、教育資金も貯められる、といった職業は限られています。

昼職に付けないからやむを得ずという人は確かにいますが、最近は真面目に風俗という人が多い気がします。昼職でも普通に働ける人たちです。さらにはもっと肯定的な人もいて、例えば自分の快楽のためとか、決

まった生活リズムをするのが嫌いだからとか、そういう理由で積極的に風俗を選ぶ人も増えています。

もちろん、肉体的にも精神的にも合わない人には合いません。無理して続けることはよくありませんが、自分でやるぞと決めて続けている人たちは、プロ意識も高く、お客様の満足度も高い傾向にあります。。

（亀石）

性風俗の利用者にはさまざまな人がいると思います。今回はその中で障害者の方と高齢者の方について伺いたいと思います。まず障害者の方のご利用について教えてください。

（Aさん）

私自身、障害がある方の接客は経験があります。例えば全身硬直で寝たきりの方です。申し込みや連絡、お金の受け渡しやプレー時間の選択などは介護の方が行います。ご自宅に伺い、プレイが始まる際に介護の方は席を外します。他には、片足がない方や腕がない方、人工肛門の方、目が見えない方や話すことができない方など様々です。原告のお店は、ウェブサイトに車椅子の方向けの情報なども載せています。障がい者向け風俗店を紹介するサイトなどにも掲載されています。他方で、最近は障害者の方専門の風俗店も増えており、そういったお店に比較すれば原告のお店に来られる方は多くはないと思います。

障害者の方であっても他のお客様と特に違いはありません。私としてはいつもと同じように私のできるサービスを提供するだけで、そのお相手が誰であっても同じことです。コックさんが料理を提供する方がどなたであっても美味しいと言われれば嬉しいのと同じです。

（Bさん）

私も手足がない方や車椅子の方の接客経験があります。私も同感で、特別嬉しいとか特別嫌だということは全くなく、満足していただけたら嬉しいという点で、他のお客様と同じです。

ただ一つだけ、私たちは介護のサービスは提供できないので、そのヘルプを頼まれて困ったことはあります。危険なこともありえるのでそれは必ずお断りしています。他方で介護の資格をもつキャストなどは、そういったお客様への対応もできる場合があると思います。

（亀石）

ホワイトハンズといった、介護として射精介助を提供するサービスもあると聞いています。そういったところとの違いはありますか。

（Aさん）

最大の違いは、温もりだと思います。介助系のお店は、性質上当然ですが、介護の免許を持っている方が機械的・事務的に対応すると聞いています。やはり多くの人は、他の人と密着したり、キスをしたり、さらに先の接触をしたいものだと思います。温もりによって得られる精神的な安心感や満足感は、結構大きいと感じます。

また、介護系のサービスの場合、女性向けはほとんどないと聞いています。最近は女性用風俗も増えていて、その点でも風俗ができることは少なくないと感じます。私自身も最近勉強をしているのですが、フェムテック（Female＋Technology）という言葉があります。女性の肉体的・精神的な健康問題をテクノロジーで解決するサービスや製品をさしますが、その一環で性的な問題についての研究も進んでいます。その一つとして女性の膣をマッサージすることが自分の体を大切にすることにつながり、自

己肯定感につながるといった考え方があります。障がい者の方に限らず、パートナーがいない場合や、いるとしても既にそういう関係にない場合などに、風俗店が提供できる価値は少なくないと思います。

（亀石）

高齢者はどうでしょうか。社会が高齢化する中で、利用者も増えているのではないでしょうか。

（Aさん）

当然ですが高齢者も普通に来られます。ただ、最近は風俗店それぞれが個性を出そうとしており、高齢者に特化したお店なども出てきているので、原告のお店が特別に多いというわけではないと思います。比率も取り立てて多いという印象はありません。私のお客様は30代から50代がメインで、特別高齢者が多いということはありません。

（Bさん）

私も同様です。

（Aさん）

高齢者も様々ですが、比較的共通することとして、パートナーとの性交渉が難しいということがあります。夫婦仲が良かったけれども妻に先立たれたとか、妻はもう閉経していて対応できないから妻公認で対応するなどがあります。実際、男性の性欲は80代、90代でも維持している方が少なくないけれども、パートナーとはもうできないため、そのミスマッチを埋めるために風俗店を利用するというお客様は多いと思います。

（Bさん）

また、やはり70代、80代の方として、身体的な温もりを通じて癒してほしいというニーズが強い傾向にあると感じます。話すことによって癒される方はスナックなどに行くのだと思いますが、身体的な温もりを求める方は風俗を利用しているという印象です。

（Aさん）

あとは、性的な機能を回復するために来るという方もいなくはありませんが、私たちの店はデリヘルなのでそこには特化していません。風俗店の中には、睾丸マッサージや回春マッサージなどを通じて機能回復を打ち出しているところもあります。男性機能をキャストも勉強して、そこに専門性を見出し、EDの方に特化しているところなどもあります。

EDなどにとどまらず、健康面からも射精は重要という研究もあるそうです。射精によって男性ホルモンを活性化することが良いという話のようです。射精回数が多い方が前立腺癌のリスクが低下するという研究結果があるようです。また当然ですが、肉体的な接触は精神的にも良い影響があります。自信を取り戻すことにもつながるようです。

さらには膣マッサージに関する専門性を高めるなどして、女性の高齢者に特化したお店も出てきています。女性も実は加齢によりそれほど性欲は落ちないとされています。40代、50代でも性欲が変わらない人は少なくありません。けれども女性の場合、仕事や妊娠・出産などで長い間パートナーがいなかった方や、いたとしてもセックスレスが続いていた方など、長い間性交渉をしてこなかった方も少なくありません。例えば、学生時代にスポーツをしていたが、20年ほどブランクがあると、再開し始めには体がついてこないように、性交渉も長年していないと肉体や文化的感覚

がついてこないことがあります。そうすると性欲をパートナーにぶつけるのにも勇気が必要となりますし、パートナーに断られる恐怖もあります。

そういう方にとってマッサージなどを通じて性的な能力を回復させるタイプの風俗はとても魅力的のようです。膣や子宮のマッサージがメインのようです。典型的な風俗ではないため抵抗も少なく、利用者も増えていると聞いています。医者と連携しながら進めているところもあるようです。

女性用風俗によって自信を取り戻す方もいらっしゃいます。母親でも家政婦でもなく、一人の女性として扱われることで自尊心が回復するようです。

（亀石）

お二人も女性のお客様の経験はあるのでしょうか。

（Aさん）

私は女性向けの勉強もしていてそれを打ち出しているので、時々お越しになります。ただ私は性的機能の回復の専門家ではないので、純粋に性的サービスを提供しています。お客様に目的を聞いて、その人の希望に合わせていますし、それを超えては決して踏み込みません。バイの方から彼氏もいて男性との性行為はできているが、女性とはなかなか機会がないので来ましたという方などもいました。

（Bさん）

多くはありませんが、何名か経験はあります。女性お一人のお客様の中には、同姓同士でじっくり体を見たことがなかったので、そういうことをしたいという方もいました。性的なサービスを求めるというよりも、

女性の体に興味があってきたということでした。あとはカップルのお客様が、カップル同士の性行為のトッピングのような位置付けで依頼されたこともあります。セックスレスまでは行かないが刺激というか起爆剤みたいなものが欲しいと言われました。

（亀石）

最後に裁判官に伝えたいことがあれば教えてください。

（Aさん）

一審の判決は、性的なコミュニケーションの相手方を限定しすぎていると思います。いまや東京の40代男性の3割、40代女性の2割以上が独身です。パートナーがいない方達にとって、風俗以外で性的コミュニケーションを取ることはかなり難しいと思います。また、年齢が上がれば上がるほど、恋人がいない期間も長くなります。突然恋人ができたからといって、いきなり性的コミュニケーションを取ることはハードルが高いので、風俗店でいったん練習をする、という人もいます。

また、当然ですが結婚していても、パートナーを性的な対象とみなさなくなる家庭は少なくありません。ある調査では50％以上の夫婦が1年以上セックスレスとされています。けれども夫婦ともに性欲は消えていません。パートナー以外との性的コミュニケーションを否定することは、この50％以上の人たちの性的コミュニケーションを否定することにつながると思います。

（Bさん）

私は、裁判の中で大多数の国民がそう思っていると断言されたことはショックでした。アンケートを取ったのか、統計を取ったのか、何を根

拠に大多数の国民の理解という言葉を使うのかと思いました。風俗に対する国民のイメージも、時代が変わってきて変わっているのではないでしょうか。そういう配慮がありませんでした。

（Aさん）

もう一つ判決に対しては、違法風俗と一緒くたにされたことに憤りを感じました。税金も払って届出を出して健全経営をしている店と、違法なところを一緒くたにしています。風俗店の中にも、健全店と、不健全な店・違法な店があります。飲食店の中にぼったくり店があるのと同じです。全てまとめて本質的に不健全とするのは乱暴だと感じます。そのような雑な認定を裁判所が言うと、夜の仕事イコール悪となってしまい、業界全体としてそのように見られてしまいます。

（Bさん）

私は同僚たちと、ぜひ裁判官に一度風俗店を使って欲しい、特に一審の裁判長にはぜひ使って欲しいと話していました。私たちのお客様の中には公務員の利用者も当然います。教師や警察官など固い職業の人たちもいます。風俗について本質的に不健全と述べていましたが、一度健全な店を使ってくれれば、そのような乱暴な判断はしないのではと感じました。

以上